日本経済新聞　平成28年8月16日

バイオマス燃料　国内で安定調達難しく

王子HDなど輸入拡大

バイオマス発電に使う木質燃料を海外調達する企業が増えている。王子ホールディングス（HD）は2017年に輸入量を現在の約2倍にする。発電量が天候に左右されないバイオマス発電は再生可能エネルギー導入拡大の鍵を握る。だが国内の間伐材などだけで発電需要を賄うのは難しく、普及に伴い燃料の海外依存が高まりそうだ。

バイオマス発電の稼働率は8割程度と、太陽光の1割、風力の2割程度に比べ高い。政府はバイオマス発電を安定的な電源とみて、30年にバイオマス発電の導入量を最大728万キロワットと14年の3倍に増やす目標を掲げている。

だが燃料となる間伐材などは林業の衰退もあり安定調達が難しい。そこでバイオマス発電事業者が注目しているのがパーム油製造時に出る種子の殻（パームヤシ殻、PKS）だ。東南アジアが主要産地で燃焼時の熱量が木材チップの倍で効率的に発電できる。

王子HDはインドネシアで、現在年6万トン程度のPKS集荷量を17年前半に10万トン規模に増やす。製紙に使う木材チップの調達網を生かす。新電力のイーレックスは19年度までにPKS輸入量を現在の9倍の90万トン程度にする。両社とも現在は自社の発電だけで使っているが、外販も始める計画だ。

バイオマス発電燃料に占める輸入品の比率（発電ベース）は現在数%。政府は30年のバイオマス発電の導入目標達成には、半分程度を海外に依存する必要があるとみている。再生エネ発電の促進は、石炭など輸入燃料への依存や脱却も狙いの一つ。導入を拡大すれば燃料の海外依存がまるという「矛盾」の解決という新たな課題になる。